

## 旧岡部町四十塚古墳出土の鈴杏葉

関 義則

### はじめに

2016年に深谷市在住の方から父親が収集した遺品を寄贈したい旨の連絡が県教育委員会にもたらされた<sup>(1)</sup>。その報を受けて県立歴史と民俗の博物館が事前調査を実施したところ、遺品には考古・歴史・民俗と多岐にわたる分野の資料が含まれていることが判明し、埼玉県に由来する資料も多く認められた。そこで、県立各館で協議し、古文書資料は県立文書館、民俗資料は県立歴史と民俗の博物館、考古資料は県立さきたま史跡の博物館というように分野別に各館で受け入れることになった。さきたま史跡の博物館が受贈した考古資料は、打製石斧・縄文土器・土師器・埴輪など石器や土器類を主体として、それに若干の金属製品が含まれていた。金属製品は、帶鉤や鍍金された四葉座金具、銅鏹などで中国前漢時代の遺物と考えられるものが大半であった。既に所有者は故人となっているためこれらの収集品を入手した経緯は詳らかではないが、土製品や石製品は基本的に深谷近在の出土品と推定されることから故人が収集家であることを知る近隣の人々から持ち込まれたものであり、中国前漢時代の金属製品は楽浪漢墓に由来する資料である可能性が大きく、戦前に好事家同士の交流によって入手したものと推測される。

ところで、金属製品の中には国内で製作されたと考えられる資料も若干ではあるが含まれていた。その中に古墳時代の鋳造製の三鈴杏葉と鉄製の十字形辻金具が各1点存在する。それらは現状では別々に分離しているものの辻金具の4脚のうちの一方には半円形の金具が鋲留めされており、その金具と鈴杏葉の立間に鋸着していたU字形の鉄製の金具とが接合することが判明した。つまり、半円形金具とU字形の鉤は鈴杏葉の立間に取り付けられた吊金具が折れて分離したものであり、この鈴杏葉は使用時には吊金具を介して辻金具に直接鋲留されていたものだったのである。そして、後述するようにこの鈴杏葉と辻金具のセットは、かつて旧岡部町に所在した四十塚古墳から出土し、その後行方不明となっていた鈴杏葉と見做してほぼ間違いないことを確認することができた。

旧岡部町四十塚古墳の出土品は、昭和初期に開墾作業に伴って偶然に出土したもので、出土後は発見者によって近隣の小学校に寄贈されたものの、後に出土品のうち鈴杏葉3点は行方不明となっていたものである。そして、今回、計らずも寄贈された資料に、そのうちの1点が含まれていたのである。

そこで、本稿では実物が確認されたこの鈴杏葉と辻金具のセットを改めて紹介するとともに、三鈴杏葉が提起するいくつかの問題について言及することにしたい。

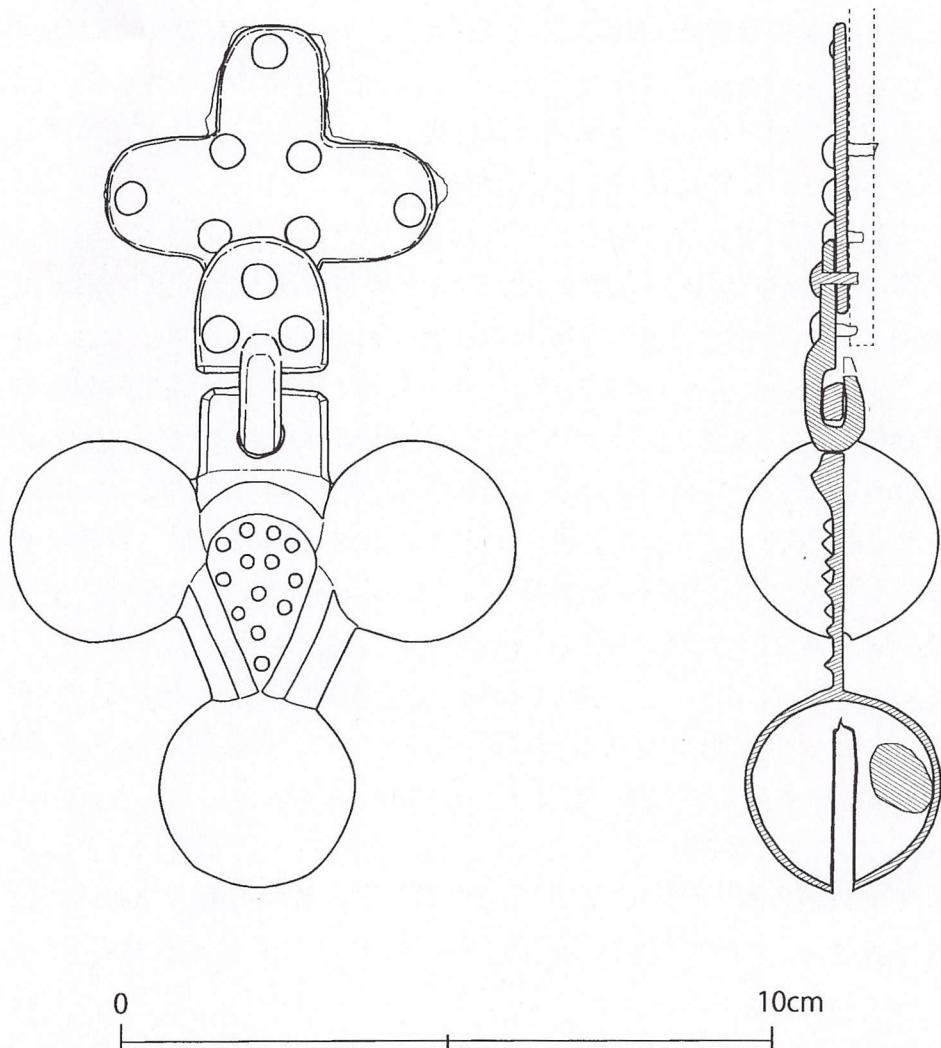
## 1 資料の概要

### (1) 鈴杏葉

鋳造による青銅製の三鈴杏葉で、全長7.6cm、幅7.7cmの小型品である。鈴はほぼ同大で径3.1cmほどの大きさで、それぞれ内部に小石が1個ずつ入れられている。断面三角形の縁の内部は径2mmほどの珠文が13個配置されている。三角の板状部分には隆帯で区画される扁円部は存在しない。また、中心となる珠文は無く、ほぼ同心同寸の珠文が一見すると剣菱の切っ先に向かって扇状に展開しているようにもみえる。立聞は、幅2.0cmで、小鉤を通す円形の孔が開けられている。吊金具は、鉄製で高さ1.4cm、幅1.3cmの爪形で、中心下部からU字形の吊舌が伸び立聞の孔に通されている。この吊金具は径5mmほどの鉢3個で辻金具にリベット状に留められているが、辻金具に連結しているのは上部の1鉢のみで、下の2鉢は辻金具に留められていた革帶に直接留められていたものと思われる。

### (2) 辻金具

辻金具は、鉄製の十字形で中央部に鉢状の盛り上がりが無い平板形である。5.1cm×4.4cmで四方の足のうち三方は長1.6cmほどで先端は爪型となっているが、吊金具が取り付られた



第1図 岡部町四十塚古墳出土の鈴杏葉と辻金具

一方の足のみは方形で長0.8cmと他の足よりも短く、全体として奴尻状の形状となっている。交差する中央部に方形に4鉢配置し、爪形の三方の爪先にはそれぞれ1鉢配置する。鉢は鋳に覆われているが鉄地に銀板を被せたものと思われ、瀟洒な造りとなっている<sup>(2)</sup>。辻金具の裏面には革の痕跡が残っており、鉢の足の長さからおよそ5mmの厚さの皮革であったことがわかる。

杏葉は本来、雲珠もしくは辻金具と革や布の帶を介して垂下されるもので、杏葉が辻金具に直接鉢留められている事例はそれほど多くはない。一足のみが方形でそこに杏葉が鉢留めされていることからみて、最初から鈴杏葉を直接鉢留するためにセットで製作されたものであることは明らかであろう。

## 2 四十塚古墳と出土馬具

### (1)四十塚古墳と出土品

この鈴杏葉と辻金具には、受け入れの際に国済寺出土と記されたラベルが付されていた。国済寺は深谷市に所在する臨済宗南禪寺派の寺院であり、寺域であったその周辺一帯は現在では国済寺あるいは国済寺町という字名になっている。国済寺の東方には古墳時代後期の群集墳である木の本古墳群が所在していることから、同古墳群出土品が国済寺出土と記されて今日に伝世したことは十分に考えられる。しかしながらこのラベルは結論から言えば錯誤であり、この鈴杏葉と辻金具は国済寺地内もしくはその周辺の古墳から出土したものではなく、後で述べるように深谷市に隣接していた旧岡部町岡に所在した四十塚古墳からかつて出土したものとみてほぼ疑いないと思われる所以である。

旧岡部町の四十塚古墳は、既に消滅した古墳であるが、県北地域で上部山地の東側に広がる櫛挽台地の先端部近くに位置し、眼下に針ヶ谷堀を見下ろす高台に所在していた。周辺には多くの古墳が所在し四十塚古墳群を形成しているが、大半は開墾等によって消滅しており、古墳群の総数や詳細な時期などの実態は不詳である。四十塚古墳も、その詳細は不明であるが墳丘掘削直後のメモなどによれば径20m程度の円墳と認識されていたようである。昭和7年に農地開墾によって墳丘が削平された際に馬具や短甲・鉄鏃などの遺物が出土し、それらの遺物は近隣に所在した岡部町立岡部小学校に土地所有者から寄贈された。主体部は、後の聞き取りではあるが竪穴系であり、川原石を用いた礫構造であった可能性が大きいことが指摘されている。このように戦前の出土にもかかわらず当時の事情がかなり明瞭に判明しているのは、同校の教員であり文化財に深い関心を寄せていた柿沢利雄氏による詳細な記録が残されていたためである(岡部町教委 2005)。

その後、岡部小学校に四十塚古墳出土品が保管されていることは永らく忘れ去られていたが、平成9年に岡部町教育委員会により旧岡部町史編纂のための資料調査が行われ、改めて岡部小学校に四十塚古墳の遺物や図面等が収納されていることが確認された。

柿沢利雄氏による記録によれば、四十塚古墳からは、横矧板鉢留短甲1領、鈴付楕円形鏡板付轡1点、鉄製楕円形鏡板付轡1点、鉄斧1点、鈴杏葉3点、鉄製十字形辻金具2点、鉄刀2振、鉄剣1振、刀子4点、鑿1点、鉗1点、銅鏡1面、鉄鏃81本が出土していた

ことがわかる。これを平成9年に行われた町史の調査と照合すると、鈴杏葉、鉄製十字形辻金具、鉄刀、鉄剣、刀子、鑿、鉈、銅鏡、鉄鏃の一部が所在不明となっている。その一方で、耳環など柿沢氏の記録にない資料も存在し、また棘笠被をもつ鉄鏃など明らかに時期的に新しいと判断できる遺物も含まれている。柿沢氏の記録は、スケッチを含め極めて詳細であり、しかも用いられた用紙から昭和16年以前のものであることが確かめられており、遺物が寄贈されてから余り時間が隔たっていない時期のものとして貴重である。従って、町教育委員会が刊行した報告書で瀧瀬芳之氏が整理しているように、柿沢氏の記録にない耳環や棘笠被をもつ鉄鏃などは、永い時間の経過の中で他の古墳出土遺物が混入してしまったものと思われる。戦前の学校では付近で出土した文化財の保管場所となっていることも多く、四十塚古墳以外の古墳から出土した遺物も保管されたであろうから、当時の保管水準を考慮すればこうした混入も十分に起こり得たものと考える。

## (2)四十塚古墳出土の馬具とその年代

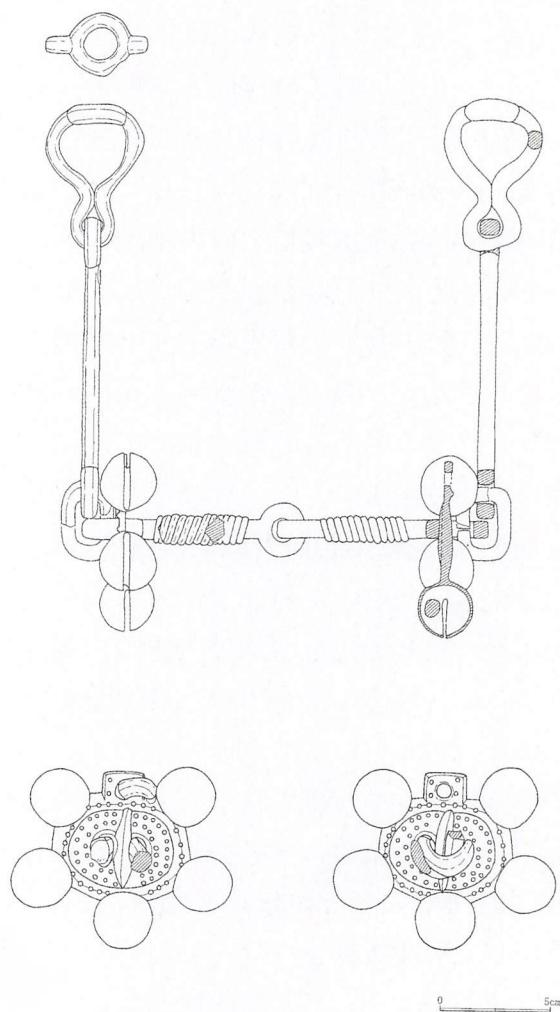
四十塚古墳から出土した馬具は、轡が2点(鈴付楕円形鏡板付轡1、鉄製楕円形鏡板付轡1)と鈴杏葉3点、鉄製十字形辻金具2点、鉸具1点、飾金具1点である。このうち、平成9年

度の町史の調査段階で実物が確認できたのは、2点の轡と鉸具・飾金具であり、既に報告されているがここで改めて簡単にふれておく。

鈴付楕円形鏡板付轡は、鋳造製の鏡板の周囲に5個の鈴を配するもので、鏡板内部は、同心円状に二重に珠文を巡らせるほか、縁の稜線上と立聞にも鉢を意識したように珠文が鋳出されている。衡はほとんど残っていないが二連式で捩じりをもつ形に復原されている。衡と引手は、鏡板の外側で遊環を介して連結するもので、引手壺は別造となっている。

五鈴の鋳造鏡板付轡は、類例が少ないものの愛知県志段見大塚古墳や兵庫県よせわ古墳からも出土しており、おおむねTK47型式段階のものと考えられている。

鉄製楕円形鏡板付轡は、両方の鏡板とともに半分ほど欠損しているが、幅9.0cm、立聞からの高さが6.5cmと推定され、鏡板の下部は内湾せずほぼ直線的である。衡は二連式で中ほどに膨らみをもち、衡と



第2図 鈴付楕円形鏡板付轡

引手は、鋳造馬具同様に鏡板の外側で遊環を介して連結し、引手壺は「く」の字に外反する円環状となる。やはり、おおむねTK47型式段階のものと考えられる。

鉗具は輪金の断片品であり判断が難しいが、鉄地金銅張の飾金具は、他に鉄地金銅張製品の馬具が出土していないことに加え、柿沢メモにも見当たらないことから、瀧瀬の指摘どおり別の古墳出土の混入品である可能性が大きい。

共伴している横矧板鉢留短甲は、全ての鉢頭に金銅板を被せるという凝った作りの甲であるが、豊上3段、長側4段構成で鉢頭も大きく、鉢間も比較的疎らであることからTK47型式期のものとして良いであろう。鉄鏃の年代もこれと矛盾しない。

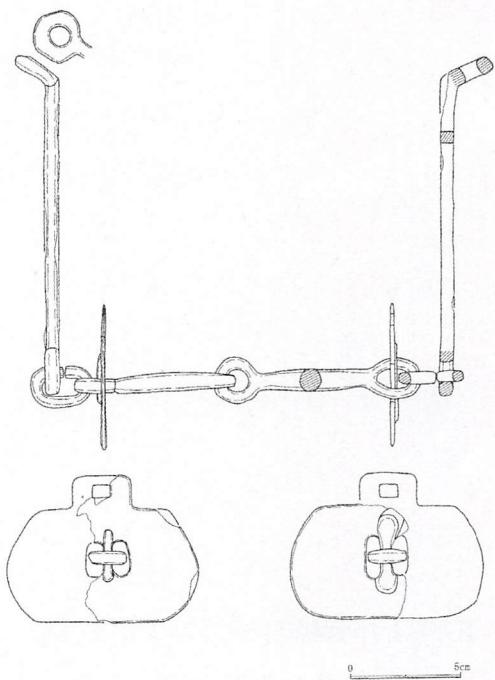
全体としてみれば、四十塚古墳の礫榔出土遺物の年代は、TK47型式期段階と認めてよいものと思われる。

### 3 行方不明の鈴杏葉と辻金具

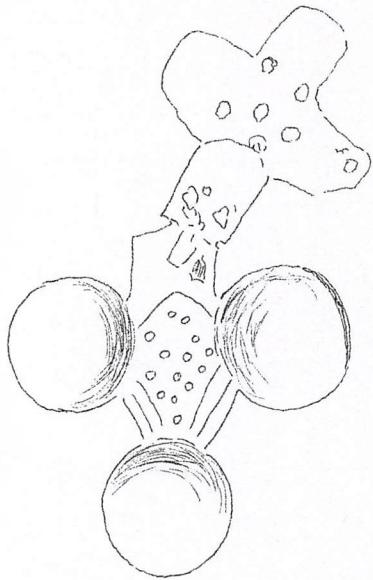
四十塚古墳では、現在では行方知れずとなっているが、柿沢利雄氏によるスケッチ(以下、スケッチ)には、(a)・(b)・(c)と記載された3点の鈴杏葉が存在する。スケッチは、全体として信頼性が高いと判断できる記録であるもの、鈴杏葉に関しては通有の鈴杏葉とは異なる形状や規格が表現されていることから、筆者はこれまでその信憑性について疑いをもっていた。ところが今回、非常に似通った実物が確認できたので、それらのスケッチと今回寄贈された鈴杏葉を改めて比較してみよう。

まず、中心珠文や扁円区画を持たない点は両者で一致している。また、スケッチでは(a)の鈴の直径が3.1 cmと記されており、寄贈された鈴杏葉の鈴の直径と一致している。全体のスケールは記載されていないが、鈴径の記載から推定した全長や横幅もほぼ同寸と判断できる。ただし、実物の縁内部の珠文配置は(a)・(b)・(c)のどれとも完全に一致するものはない。その中では(b)のスケッチと珠文数が一つ異なるだけで、全体の珠文配置は非常に似通っているといえる(第4図)。

一方、辻金具では、形態が板状の十字形であることや先端が半円形(爪形)になっている点は一致している。実物の鉢は鉄地に銀を被せたものであるが、スケッチの鉢の材質の記載は見当たらない。既に鏃に覆われそれと認識できなかったのである。注目される点は、スケッチの鈴杏葉(b)では鈴杏葉の吊金具が辻金具の脚に直接留められ、やや傾いて鏃着している状態に記されており、その状態が今回の寄贈品の状態と完全に一致していることである。鈴杏葉は鋳造品であることから他に同型のものが存在する可能性を否定できない



第3図 鉄製橢円形鏡板付轡



第4図 柿沢利雄によるスケッチ (b)  
杏葉と辻金具の連結構造

が、錆着状況はこの資料固有の特徴であり、まったく同じ状態で錆着した資料が他に存在することは考えづらい。

このように規格や形状さらに辻金具と鈴杏葉の錆着状況から判断すると、今回寄贈された鈴杏葉は、かつて四十塚古墳から出土し、その後に行方不明となっていた鈴杏葉3点のうち、スケッチ(b)の鈴杏葉であるとほぼ断定してよいと思われる。鈴の厚みが(a)で2.7cmと記録があるのに対して、この鈴杏葉は3.0cmであり現状では多少誤差が認められるものの、数値の幅は僅かで個体差によるものか計測誤差とみて差し支えないであろう。また、辻金具の鉄の配置もスケッチでは中心に一鉄存在し、5鉄のように見えるが、中心の鉄は錆膨れを誤認したものと思われる。

## 4 鈴杏葉を巡る諸問題

### (1) 杏葉と辻金具の連結構造

四十塚古墳出土の鈴杏葉は、吊金具が鉄製十文字辻金具の一方の足金具に直接鉄留されている。杏葉は本来、雲珠もしくは辻金具と革もしくは布などの有機質素材の帶を介して垂下されることが多く、本例のように杏葉が直接辻金具に直接鉄留められている事例は多くない。

本例では、吊金具が鉄留された足が他の三方の足よりも短く形状も異なっていることから、あらかじめこの足に鉄留することを想定しており、両者はいわばセットとして製作されているものであることがわかる。

雲珠・辻金具に杏葉が直接留められた事例はいくつか知られている。千葉県市原市の江子田金環塚古墳では、鐘形杏葉が半球形の辻金具の脚に直接鉄留された状態で出土している。この古墳では雲珠・辻金具・杏葉が折り重なるような状態で出土しており、雲珠から辻金具を介して杏葉が垂下される尻繫構造であったことがわかる。5点出土した杏葉は、鞍の後方に左右に2点と後方に1点配されたとみなすのが妥当であろう。

島根県上島古墳では、数組の馬具が出土しているが、そのうち十文字透心葉形鏡板と組み合わさる金銅装半球形雲珠は宝珠形の脚をもつが、8脚のうち1脚のみ他と異なり方形で、そこに心葉形透杏葉が直接取り付けられていた。また辻金具も同様に1脚のみが方形でそこに心葉形透杏葉が取り付けられていた。左右に垂下される杏葉は辻金具を介して、後方に垂下される杏葉は雲珠から直接垂下される構造であり、このことから雲珠・辻金具・杏葉を尻繫でどのように構成するのか予め決定された上で製作されていたことがわかる。同じ島根県の上塩冶築山古墳でも、八脚の雲珠や四脚の辻金具に心葉形の杏葉が直接鉄留されていた。また、三重県亀山市の井田川茶臼山古墳では、剣菱形杏葉が板状組み合わせ式の辻金具に取り付けられ、群馬県伊勢崎市古城稻荷山古墳では八脚雲珠に花形杏葉が鉄

留されている。さらに、福岡県の寿命王塚古墳では、忍冬文をもつ楕円形杏葉が半球形の六脚雲珠に鉢留されており、奈良県藤の木古墳においても、Bセットとされる鐘形杏葉1点だけが、半球形雲珠に直接鉢留されている。

このように、雲珠や辻金具に直接杏葉が留められる類例を瞥見すると、特定の杏葉形式に左右されず、さまざまな形式の杏葉が用いられていることがわかる。

その一方で、時期的にはTK10型式以降に多出する傾向が窺える。こうしたことから時代が下がるにつれて杏葉枚数が増加するとともに尻繫構造が複雑化し、雲珠と杏葉の間に辻金具を介在させる尻繫構造が採用されるようになり、雲珠や辻金具に直接杏葉を留める手法が生まれたものと考えられる。

一方、鈴杏葉では、先に述べたように直接に雲珠や辻金具に接続されている事例は今のところ見当たらない。鈴杏葉が表現された馬形埴輪をみても、左右と後方の3方向に1点ずつ配置するのが一般的で、雲珠に辻金具を組み合わせる複雑な尻繫構造は採用されていない。馬形埴輪の表現は実態から離れて様式化されたものとする見方もできるが、個々の馬形埴輪の表現は個性的であり、誇張や簡略化・省略化されているとしてもある程度実物を反映して製作されていると考えられる。とすれば、鈴杏葉においては雲珠や辻金具に直接鉢留する手法が一般的ではなかったとしてよいであろう。

そのようにみれば、年代的にみてもTK47型式期に相当する本鈴杏葉と辻金具は、鈴杏葉の装着事例としては極めて例外的な存在であるとともに、辻金具に雲珠が直接鉢留される装着法のもっとも古い事例とすることができます。

ところで、他に類例が存在しないことから、当該資料が尻繫に装着されていたのではない可能性も考えてみる必要がある。四十塚古墳では、年代や他の類例からみて鉄製の環状雲珠が組み合わさると推測されるが、そうした雲珠や脚となる足金物がまったく出土していないため、実際のところ、尻繫が存在したか否かも明確ではないのである。

この時期に杏葉が尻繫以外に用いられたと推測される事例がいくつか存在する。長野県新井原12号墳から出土した馬具は、f字形鏡板付轡と板状組合造辻金具に剣菱形杏葉が1点のみ伴っていた。この馬具は馬殉葬土坑から出土したもので盗掘や散逸の可能性を考えにくくにもかかわらず杏葉は1点のみであり、また尻繫に関連する金具も検出されなかった。このことから、宮代栄一氏は当該馬具を面繫のみの馬装とみなし、1枚だけ出土している杏葉は島根県平所窯跡出土の馬形埴輪において額飾1点、尻繫に2点剣菱形杏葉を表現している事例があることや唐代の三彩馬に額飾があることを参考に額飾に用いられたものと推定している(宮代1997)。また、群馬県の白藤P-6号墳から出土した馬形埴輪は、尻繫に三方に下げた五鈴杏葉を表現しているが、それと別に面繫のこめかみの交差箇所に3つの鈴が表現されている。この馬型埴輪から、胸繫だけでなく面繫にも鈴を付けた事例が存在することがわかるとともに、辻金具にも関わらず三鈴で表現されていることから、辻金具に三鈴杏葉を取り付けた状況を表現した可能性も考えられる。

また、形状や規格の異なる杏葉が複数伴っている事例では、その一部が胸繫装飾である可能性が指摘されている。大阪府南塚古墳では、鐘形杏葉が16枚出土しており、枚数の多

さや杏葉に大小の規格差があることから、小野山節氏や宮代栄一氏は、全て尻繫に装着したわけではなく一部は胸繫に装着されたものと推定している。また、桃崎祐輔氏は、福岡県山の神古墳から1セットの馬具として剣菱形杏葉とやや小さい瓢形杏葉の2種類の杏葉が出土していることから、剣菱形杏葉を尻繫に、瓢形杏葉は胸繫にと分けて装着されたものと推定している（桃崎2014）。尻繫に異なった杏葉を混ぜて装着したことは考えづらいので、この想定は有力なものと考える。

新井原12号墳や山の神古墳はTK23～47型式段階に位置づけられるもので、四十塚古墳の馬具と年代が近く、この段階に杏葉状の飾板を額飾や胸繫に装着した可能性が存在することは重要である。

四十塚古墳の鈴杏葉がどこに取り付けられたものであるか現状で判断することは難しいが、5世紀段階では尻繫に杏葉を伴わず胸繫に馬鐸を取り付けた馬装が存在する一方で、この時期に雲珠に辻金具を組み合わせて杏葉を垂下する複雑な尻繫を構成することは考えにくいとすれば、鈴杏葉が共伴している場合でも、尻繫ではなく胸繫や面繫に杏葉が配された馬装の存在を検討する必要があるだろう。本例は鈴杏葉としては最も初期の段階の資料と考えられ、三鈴杏葉の成立自体がさまざまな試行錯誤の一環であったとすれば、その用法についていろいろな形が試行されたことも十分に想定されるのである。

## （2）鈴杏葉の型式学的変遷

四十塚古墳出土の鈴杏葉は、小型で内区円圈文や中心珠文が存在しないという点で、通例の三鈴杏葉とは大きく異なる特徴を有している。先に述べたように、この鈴杏葉は鋳造製鏡板付轡や横矧板銛留短甲との共伴関係からみて三鈴杏葉の中でも古い段階に位置付けられると評価されているもので（桃崎2011）、鈴杏葉の成立やその後の型式学的変遷を考える上でも重要な意味をもつ。今回、実物を確認できたことで、改めてこの問題について検討を加えたい。

鈴杏葉は、その特異な形状やいわゆる鳴り物であるということから既に江戸時代から好事家の注目を集め、近代的な考古学研究が始まる明治以降もしばしば取り上げられてきた。それらの学史は桃崎氏の所論に詳述されているので省略に従うとして（桃崎2011）、本格的に鈴杏葉の型式学的分析を試み編年案を提示したのは、1980年代に入ってからのことである。永沼律朗氏が「鈴杏葉考」を提示したのが最初である（永沼1983）。永沼氏は、三鈴杏葉は基本的に小型品から大型品へ変化すると考えたが、そこでは、東京国立博物館に収蔵されている群馬県大山鬼塚古墳出土とされる小型の鈴杏葉が5世紀代に盛行する滑石製模造品と共に伴していることが一つの根拠となっていた。また、三鈴杏葉の祖形として、旧金剛輪寺蔵品の二鈴杏葉を想定した。翌年、斎藤弘氏が「鈴杏葉の分類と編年について」を表し、三鈴杏葉の成立をかつて後藤守一博士が主張したように五鈴杏葉の退化形態と考え、大型化した稻荷山古墳出土の鈴杏葉を最古式に位置付け、永沼氏が古く位置付けた伝大山鬼塚古墳出土品を最新段階に置いた。1986年には白石太一郎氏も斎藤編年をより簡潔に整理した編年案を提示し、伝大山鬼塚古墳例については滑石製模造品が存在する一方で同古墳出土品には新しい段

階の環状鏡板付轡も含まれていることから、これらの遺物は混在している可能性が大きく、その共伴性には信は置けないとして、やはり新しい段階に位置付けた。(白石 1986)

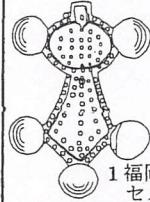
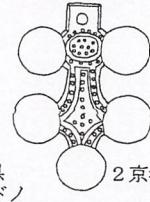
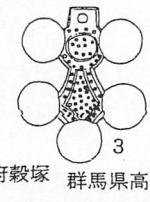
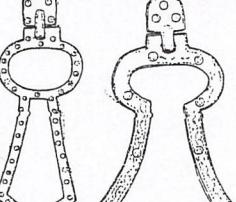
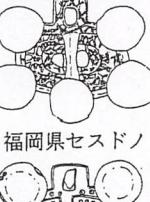
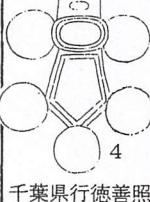
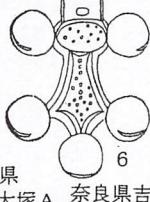
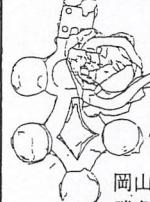
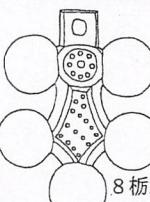
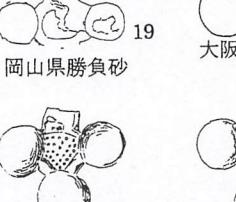
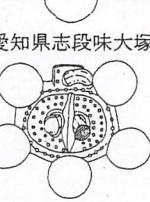
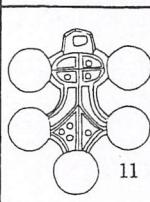
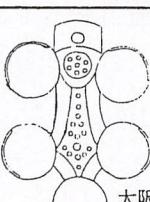
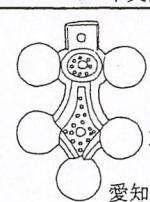
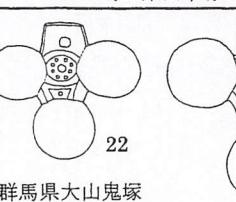
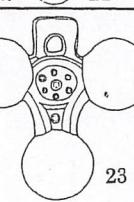
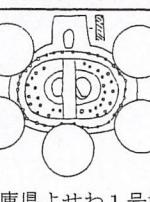
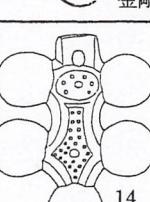
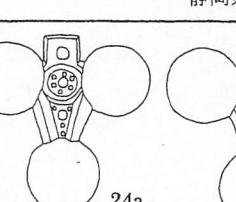
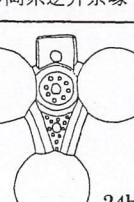
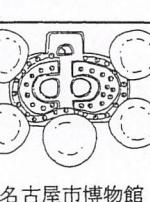
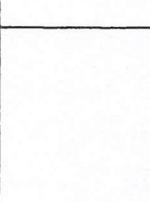
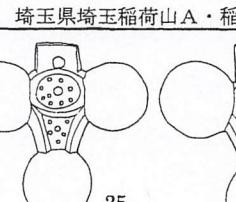
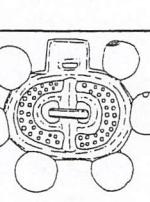
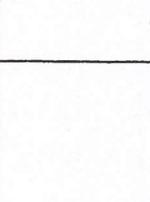
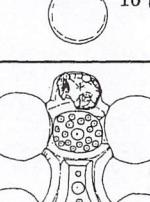
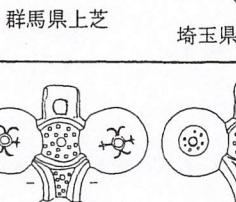
このように伝大山鬼塚古墳出土鈴杏葉の取り扱いの違いによって、三鈴杏葉の編年觀は二分される見解となつたが、実際のところ、伝大山鬼塚古墳出土品の位置付けを除けば、永沼氏と斎藤・白石氏の編年案は完全に逆転しているというわけではなく、一致している部分が多いのも事実である。筆者も、伝大山鬼塚古墳の共伴関係の不安定さから、斎藤・白石案を支持し、従来は埼玉稻荷山古墳出土の鈴杏葉を三鈴杏葉の最古型式と理解していた(関 1991)。

1990年代には、伝大山鬼塚古墳出土品の評価という点は課題として残しつつも総じて三鈴杏葉の編年は落ち着き、以後は積極的な編年案が提示されることは無かった。1996年に古墳時代の馬具を総合的に扱った内山敏行氏は、基本的には斎藤・白石案に依拠しつつも永沼案にも配慮を示した見解を提示しており、この段階でも鈴杏葉の編年問題が未解決であることを良く示している(内山 1996)。

その後、鈴杏葉を正面から取り上げた論考は永らくみられなかつたが、最近になって岡山県勝負砂古墳出土の馬具を題材に鋳造製鈴付馬具を検討した桃崎祐輔氏は、伝世品や散逸して記録しか残らない資料も積極的に駆使して鈴付の杏葉・鏡板付轡全体を整理し直した(桃崎 2011)。そのなかで、三鈴杏葉については5段階に整理し、埼玉稻荷山古墳をⅢ a の段階に置き、その前にⅡ b 段階として伝大山鬼塚古墳例と静岡県逆井京塚古墳例を位置づけ、さらにそれに先行するⅡ a 段階に埼玉県四十塚古墳例、Ⅰ b 段階の河内十六山塚古墳例や岡山県勝負砂古墳例や大阪府金剛輪寺例を置くことで、二鈴杏葉から三鈴杏葉への変遷をあとづけた。また、四十塚古墳例と伝大山鬼塚古墳例との間に型式変化からみて一型式存在する可能性を指摘し、勝負砂古墳五鈴杏葉・二鈴杏葉から始まり、金剛輪寺旧蔵品二鈴杏葉 - 四十塚古墳三鈴杏葉 - (中間型式) - 大山鬼塚古墳三鈴杏葉 - 埼玉稻荷山古墳三鈴杏葉という変遷を導出した。この編年案は、三鈴杏葉の祖形を二鈴杏葉に求めることと小型品から大型品への変化を想定している点で、永沼編年に近いものといえるものであった。

問題の伝大山鬼塚古墳例については、共伴したとされる鉸具造付立轡をもつ環状鏡板付轡を混入品ととらえ、新式三環鈴や滑石製模造品との共伴関係や大山鬼塚古墳の舟形石棺が群馬県内における石棺の編年によって5世紀末～6世紀初頭に位置付けられるものであることを根拠に永沼案を支持している。さらに、四十塚古墳出土品を伝大山鬼塚古墳例よりも先行するⅡ a 段階に置く根拠として、「古式とされる埼玉稻荷山古墳を含め、殆どの三鈴杏葉は、内区に偏円形の区画があり、その内部および下部の三角形区画のいずれにも大粒の中心珠文を伴う」のに対して「四十塚古墳の三鈴杏葉は、非常に小型で偏円区画・中心珠文を持たない点から、(中略)大山鬼塚例より更に先行する最古型式の可能性が高い」と述べている。

桃崎氏は、三鈴杏葉の成立については五鈴杏葉の省略ではなく、かつて永沼氏が示唆した二鈴杏葉からの変化の可能性を改めて指摘し、しばらく等閑に付されていた三鈴杏葉の成立や編年に係る問題を再び研究の遡上にのせた。

	五鈴杏葉	三鈴（二鈴）杏葉	鋳銅製鈴付鏡板付轡
I a	 <p>1 福岡県セストドノ</p>  <p>2 京都府穀塚</p>  <p>3 群馬県高根</p>	 <p>(参考) 熊本県塚坊主古墳</p>	 <p>29 福岡県セストドノ</p>
I b	 <p>4 千葉県行徳善照寺</p>  <p>5 愛知県志段味大塚A</p>  <p>6 奈良県吉野</p>	 <p>20 b 河内十六山家</p>	 <p>30 京都国立博物館</p>
II a	 <p>7 岡山県勝負砂</p>  <p>8 栃木県雀宮牛塚</p>  <p>9 長野県八丁鎧塚</p> <p>10 韓国中央博</p>	 <p>19 岡山県勝負砂</p>  <p>21 大阪府金剛輪寺</p>	 <p>31 愛知県志段味大塚</p>
II b	 <p>11 韩国伝固城</p>  <p>12 大阪府金剛輪寺</p>  <p>13 愛知県志段味大塚B</p>	 <p>22 群馬県大山鬼塚</p>  <p>23 静岡県逆井京塚</p>	 <p>33 兵庫県よせわ1号墳</p>
III a	 <p>14 本山考古資料</p>  <p>15 栃木県十二天塚</p>	 <p>24a 埼玉県埼玉稻荷山A・稻荷山B</p>  <p>24b 埼玉県埼玉稻荷山B</p>	 <p>34 名古屋市博物館</p>
III b	 <p>16 佐賀県潮見</p>	 <p>25 群馬県上芝</p>  <p>26 埼玉県目沼9号墳</p>	 <p>35 埼玉県広木</p>
IV	 <p>17 韩国伝昌寧二子塚1号</p>  <p>18 静岡県静岡縣出土品</p>	 <p>27 伝長野県出土品</p>  <p>28 茨城県国松古墳群</p>	 <p>0 10cm</p>

第5図 鋳銅鈴古葉・鈴付鏡板の諸段階（桃崎 2014）

さて、四十塚古墳出土品について言えば、スケッチ資料を積極的に取り上げて古い段階に位置づけた瀧瀬・桃崎両氏の案は、今回実物が再発見されて改めて詳細に観察する機会を得てみると中心珠文や円圏が欠落することや共伴する遺物からもみても適切な評価であり、筆者も埼玉稻荷山古墳出土例を三鈴杏葉の最古型式とみる見解はここで撤回しておきたい。

桃崎氏の編年案は、多くの資料を蒐集し、整理し直したもので、その変遷も説得力に富むものである。しかしながら、埼玉稻荷山古墳に先行するⅡ b 段階に、伝大山鬼塚古墳例や京塚古墳例を置く編年案に関しては、なお検討を要すると思われる。

問題のひとつとして伝大山鬼塚出土とされる鈴杏葉は略同形のものが5点存在していることがあげられる。通常、鈴杏葉は三鈴であれ五鈴であれ3点一組で用いられ、雲珠から左右と後ろの三方に垂下する単純な尻繫構造が一般的である。これは剣菱形杏葉と同じ手法である。従って、伝大山鬼塚出土とされる鈴杏葉は複数のセットが混在しているのではなく1セットとみなす限り、少なくとも通有の鈴杏葉の装着方法とは異なっていたことが想定される。初期の段階に見られる試行錯誤の製品と考えられなくもないが、既に前段階であるⅡ a 段階の四十塚古墳では鈴杏葉が3点一組となっているので、これを一組とみなす限り5点をどのように配置したのかが問題となる。4枚以上の杏葉を尻繫に装着する手法は、先に述べたように鐘形杏葉や棘葉形杏葉など時期が下る馬装に見られる手法であり、このことがかつて筆者が伝大山鬼塚出土例を新しい段階のものとみなし、斎藤・白石案を支持した理由の一つになっていた。無論、鉸具付鏡板付轡は、現在の知見ではTK209型式期のもので、鈴杏葉の変遷を考えても最新段階の鈴杏葉もそこまで下るとは考えられない。結局のところ、大山鬼塚出土と伝える遺物は、時期の異なるものが混在していることは事実としても、舟形石棺を主体部とする大山鬼塚古墳から確実に出土した遺物はどれか、ということに尽きるのであるが、現在のところそれを確認する術がなく、そのため伝鬼塚古墳出土資料の位置は保留せざるをえない。

また、型式学的变化についても、内区の中心珠文なし→大粒の中心珠文のみ→大粒の中心珠文+小粒の珠文という変遷觀は小粒の珠文がいったん消えて、また現れるという変化をたどっており必ずしもスムーズな変化とはいえないようだ。

大山鬼塚古墳と同段階のⅡ a 段階に位置づけられた逆井京塚古墳は、墳丘径20mほどの円墳で木棺直葬か粘土櫛と推定される主体部から、鈴杏葉・馬鐸・変形獸文鏡・鈴付銅釧・銅釧・鹿角装刀子のほか瑪瑙製勾玉や碧玉製管玉・ガラス製の丸玉や小玉が出土したとされる。逆井京塚古墳もやはり正式な調査によるものではなくその一括性には不安がある。しかし一方で、記録によれば1902年に土地所有者が土取りのため塚の周囲を削ったところ杏葉と馬鐸が出土したとあり、少なくとも杏葉と馬鐸は他の遺物よりも共伴の確実性が高いと思われる。この馬鐸は、4つの方形区画に交差する並行斜線を配し、珠文を充填する文様は「交差文系」に属するもので、馬鐸の編年を試みた瀧瀬芳之氏は、京塚古墳出土の馬鐸をV期に位置付け、6世紀中頃から後半の年代を与えている(瀧瀬1990)。もし、馬鐸と鈴杏葉の共伴が正しければ、鈴杏葉が相当期間を伝世したものとしない限り、この鈴杏葉は時期的に新しいものと判断をせざると得ない。内区文様の中心珠文なし→大粒の中心珠文+小粒の珠文という変遷觀の中

で、大粒の中心珠文のみのものは、逆井京塚古墳を見る限り大粒の中心珠文+小粒の珠文のバリエーションのひとつという想定も考えられるのである。

### (3)三鈴杏葉の成立

四十塚古墳出土例における鈴杏葉の内部に偏円形区画をもたず珠文のみで構成されている形状は、五鈴杏葉の下半部を切り取って上部に立聞を取り付けた形そのものといってよい。そうであるならば、やはり筆者はかつて後藤守一博士が指摘したように、三鈴杏葉は二鈴杏葉から発展したとみるよりも五鈴杏葉の製作を簡略化する過程の中から五鈴杏葉を上下に分割することで出現したものととらえておきたい。勝負砂古墳から出土した二鈴杏葉は、五鈴杏葉の下半部が欠落したものか、もともと二鈴杏葉として製作されたものか判然とせず二鈴杏葉の存否自体も定かではないが、仮に三鈴杏葉とともに二鈴杏葉が存在したとしても、勝負砂古墳例が内区円圏文をもつことからみて、二鈴杏葉が五鈴杏葉の上半を切り取った形であることは一目瞭然である。とすれば、五鈴杏葉を上下に分割することで二鈴杏葉と三鈴杏葉が成立し、のちに二鈴杏葉の下部に鈴が付加されたか、三鈴杏葉の内区に円圏文が付加されたかによって、円圏文をもつ定型的な三鈴杏葉が成立したものと考えられる。

問題は、鋳造工人によって比較的原型に忠実に五鈴杏葉が鋳造品で製作されるようになってすぐに新たな独自の鋳造鈴製品製作の動きが認められることであろう。四十塚古墳出土の鈴杏葉の類例がほとんど認められないことは、これらが試作品であった可能性を示している。こうした背景には、ほぼ同時期に鋳造馬鈴が出現していることや（白木原1997）、鋳造製の大型の鈴鉤が製作されていることからみて、独自の各種鋳造鈴製品を生み出そうとする動きがあったものと思われる。初期の三鈴杏葉が、通有の3点一組で無かったり、辻金具に直接銛留めする手法を採用するなど鈴付馬具の構成が安定していない状況は、新たな鈴馬具の馬装を模索する試行錯誤の段階にあったことを良く示していると考えられる。

こうした試行錯誤を経て、埼玉稻荷山古墳出土のような大型の三鈴杏葉を成立させるとともに、鈴付鋳造馬具をセット製作する方向から尻繋の鈴杏葉だけを製作する体制へと特化したものと考えられる（内山2011）。

そして、こうした試行錯誤は、実にTK23～TK47型式という極めて短期間のなかで生じたのである。

### おわりに

冒頭に述べたように、四十塚古墳から出土した鈴杏葉が深谷市の個人の手に渡った時期や経緯は不明というほかはない。しかしながら、所在が不明であった四十塚古墳出土の鈴杏葉が確認されたことは、鈴杏葉の成立や変遷を検討する上で有意義であった。本稿でも資料の紹介に付して、いくつかの検討を試みた。

鈴杏葉は、本資料も含め出土状態や共伴関係が不明確な資料が多く、研究の阻害要因となっている。ここで、永らく不明であった資料が紹介できたことで、当該資料研究の進展に寄与できれば幸いである。

## 《註》

- (1) 寄贈者の意向により寄贈者名は非公開となっている。
- (2) 叻金具は全体に鋳化が進行しているが、鉄は部分的に黒色化しており、銀被せの可能性が想定されたので、X線撮影を行い鉄とは異なる金属であることを確認した。撮影には野中仁氏の手を煩わせた。

## 《参考文献》

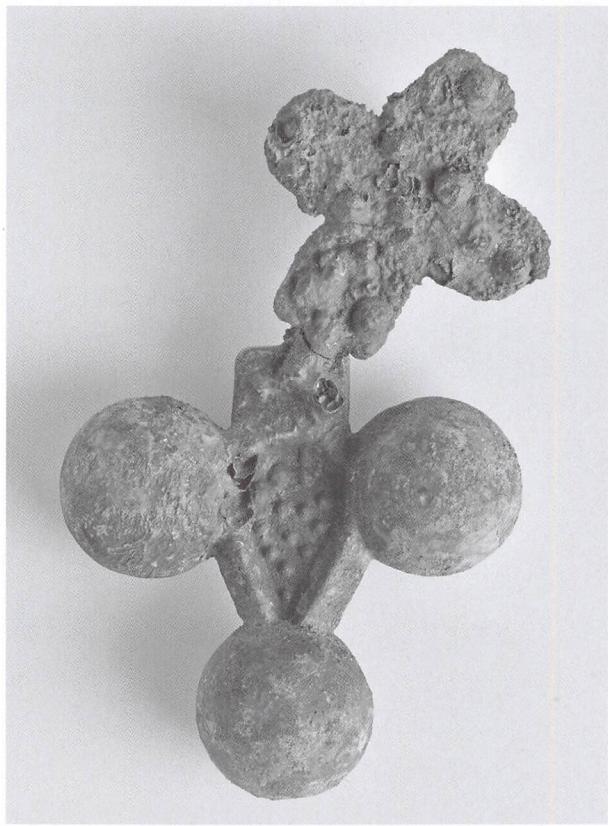
- 伊藤美鈴 1998 「逆井京塚古墳」『森町史 資料編一 考古』 森町  
内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『展示図録 黄金に魅せられた倭人たち』 島根県八雲立  
つ風土記の丘資料館  
内山敏行 2011 「中期後半から後期前半の下毛野」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学別冊17 雄山閣  
岡山大学考古学研究室編 2009 『吉備の前方後円墳 勝負砂古墳 調査概報』 学生社  
岡部町教育委員会 2005 『四十塚古墳の研究』岡部町史資料調査報告 第2集 岡部町教育委員会  
小野山 節 1959 「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』第3巻 日本III 平凡社  
瀧瀬芳之 1990 「馬鐸について」『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第94集  
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
斎藤 弘 1984 「鈴杏葉の分類と編年について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会PHALANX  
白石太一郎 1986 「古墳時代の鈴・鈴付製品をめぐって」第2回東国古墳時代談話会発表資料  
白石太一郎 1997 「有銘刀劍の考古学的検討」『新しい史料学を求めて』 吉川弘文館  
白木原宣 1997 「古墳時代の鈴－主として鋳造鈴について－」『HOMINIDS』 Vol001 CRA  
関 義則 1991 「逆刺独立三角・柳葉形鉄鎌の消長とその意義」『埼玉考古学論集－設立10周年記念論  
文集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
中村倉司 1997 「馬鐸と馬鐸装馬形埴輪」『研究紀要』第13号 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
永沼律朗 1993 「鈴杏葉考」『古代』75・76合併号 早稲田大学考古学会  
宮代栄一 1993 「5・6世紀における馬具の「セット」について - f字形鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・  
劍菱形杏葉を中心にして」『九州考古学』第68号 九州考古学会  
宮代栄一 1997 「古墳時代の面繫構造の復元—X字脚辻金具をどこにつけられたか」『HOMINIDS』  
Vol001 CRA  
宮代栄一 2010 「古墳時代の馬装」『土曜考古学研究会発表要旨』 土曜考古学研究会  
宮代栄一 2015 「古墳時代馬装における胸繫装着馬具の検討」『土曜考古』第37号 土曜考古学研究会  
桃崎祐輔 2011 「岡山県勝負砂古墳から出土した鋳造製鈴付馬具類の予察」『福岡大学考古学資料集成  
4』福岡大学考古学研究室研究調査報告 第10冊 福岡大学人文学部考古学研究室  
桃崎祐輔 2014 「山の神古墳出土馬具の検討－2セットのf字形鏡板付轡・扁円劍菱形杏葉の年代とそ  
の意義」『山の神古墳と「雄略朝」期を巡る諸問題』九州大学大学院人文科学研究院考古  
学研究室



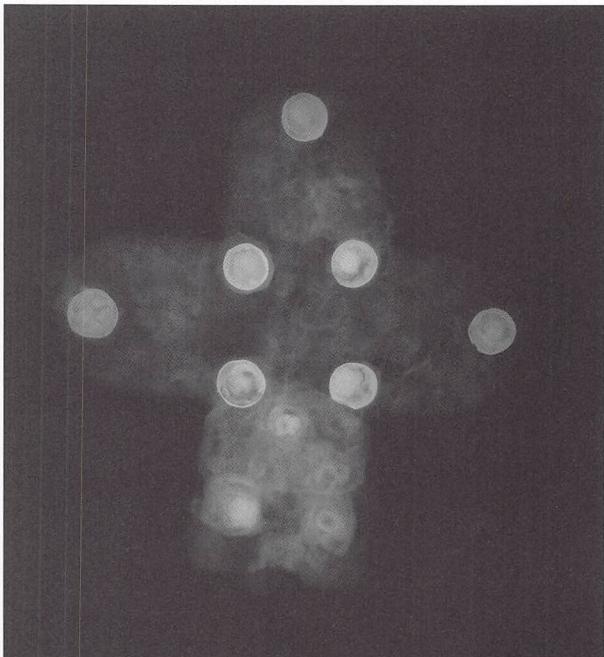
1



2



3



4

- 1 鈴杏葉  
2 鉄製十字形辻金具  
3 接合した鈴杏葉と辻金具  
4 辻金具のX線写真（裏面から）